

Title	批判期前におけるカントの空間論
Author(s)	平野, 新一
Citation	哲学論叢. 7 P.45-P.69
Issue Date	1980-10
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/66776">https://doi.org/10.18910/66776</a>
DOI	10.18910/66776
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 批判期前におけるカントの空間論

平野新一

## 序

カントによる空間論は批判期前において、次の二期に大別できよう。二期とはカントの処女論文である『活力の真の測定についての見解』（『活力考』と略す）以後、一七五六年の『物理的単子論』を経て、一七五九年の『オプティミズムに関する若干の考察の試み』（『オプティミズム試論』と略す）に至る時期いわゆる合理論的形而上学期と『オプティミズム試論』著述後から一七六八年の『空間における方位の区別の第一根拠』（『方位の区別』と略す）に至る時期いわゆる経験論的形而上学期である。

『物理的単子論』を中心にして、合理論的形而上学期における空間論を、『方位の区別』を中心にして、経験論的形而上学期における空間論を取り上げることによって、批判期前におけるカント空間論の変遷を論述する。

## 一、合理論的空間論

## (一)、合理論期における方法

カントは『物理的単子論』において形而上学と幾何学を含む自然学との関係を論述している。カントは形而上学及び幾何学を含む自然学の妥当範囲を限定することによって、両学の対立を調停しようとしている。この対立する諸問題に対するカントの解決方法は『活力考』に源泉を有する方法である。

カントの表現によると、自然学は「経験の同意と幾何学の媒介<sup>1)</sup>」による学である。言い換えると、カントにとって幾何学は自然学に含まれており、自然学とは幾何学的自然学であり、ニュートン自然学を意味する。そして形而上学とはライブニッツ形而上学である。

カントはこの自然学と形而上学との対立を調停するために『活力考』の叙述及び『形而上学的認識の第一原理の新解明』(『新解明』と略す)の叙述と同様、『物理的単子論』においても、カントは実体を前提にして論述し、空間に關してもカントは実体を前提にして論を進め、『天体の一般自然史と理論』(『天体史考』と略す)においても実体に基づく引力と斥力の作用を通じて宇宙空間論を展開している。言い換えるとカントは実体という定義から論述する合理論方法を採用している。しかし、対立の調停に關する方法にはカントの獨自性が出現している。

カントは『活力考』において、ライブニッツ派とデカルト派の活力論争を調停するために両派に共通の「中間命題<sup>2)</sup>」を手掛りにして、両派の理論の妥当範囲を限定することによって、この論争の解決を計ろうとしている。

デカルト派によって測定されている力(die Kraft)が死力で、ライブニッツ派によって測定されている力が活力である。カントは内張力即ち「ある状態を保持しようとする力<sup>3)</sup>」を持ち出すことによつて死力と活力を連関させようとしている。言い換えると内張力とは死力を活力化しようとする力である。カントは力の測定方法に關して、デカルト派

の測定方法を数学の領域において認め、ライプニッツ派の測定方法を自然学の領域において認めた。

対立するものの「中間命題に注意を向け」<sup>(2)</sup> 対立するもの各々の妥当範囲を限定して、対立するものを調停しようとする論究方法は批判期における問題解決方法のみならず、批判期におけるアンチノミー論にも通ずるものである。

(二)、三次元空間と非三次元空間

カントは『活力考』において物体が「本質力」<sup>(4)</sup> 即ち実体の「作用力」<sup>(5)</sup> を有することを前提として考察を進め、真の活力を測定しようという自然科学の課題を本質力という形而上学的概念を通じて説明しようとした。

この『活力考』においてカントは実体の作用力言い換えると「実体の相互作用」<sup>(6)</sup> という視点から空間の問題を論じている。

カントによると「ある実体が現存し」<sup>(7)</sup> 「他の実体と相互関係を有することもあり」<sup>(7)</sup> この相互作用に基づいて我々の世界は「複合体」<sup>(7)</sup> として成立する。

しかし実体は「独立な存在であるので」<sup>(7)</sup> 「他の実体と外的関係を有しないこともある」<sup>(7)</sup> その場合には「物が実際に存在しながら、世界のどこにも存在しないこともありうる」<sup>(6)</sup> とこの諸実体が相互に作用している世界も考えられうる。この種の世界は我々の世界とは「全く違った」<sup>(8)</sup> 「性質と次元」<sup>(8)</sup> を有する世界である。

カントは実体の相互作用に基づいて、現実世界と空想をも含む世界を区別した。そしてカントは空想の世界すら存在しうるといふ可能性を否定してはいず、「形而上学的理解においては多世界の存在は真である」<sup>(7)</sup> と考えている。この多世界論に続いて、カントは「ある一定の法則に従って実体が結合し」<sup>(8)</sup> 「空間をその法則に従った実体の相互作用に基づく」<sup>(8)</sup> 「実体の全集合」<sup>(8)</sup> であり「複合と結合の様式である」<sup>(8)</sup> と主張している。従って、異った法則の下では複合と結合の

様式も異なり、三次元的延長とは異つた「性質と次元数」<sup>(8)</sup>を有する延長が可能となる。言い換えるとカントは「あらゆる可能な種類の空間の学」<sup>(8)</sup>が成立しようと主張しているのである。カントにとつて数学とはユークリッド幾何学のことを意味するけれども、この『活力考』において非ユークリッド幾何学の可能性がカントによつて示されているということは多くの人々によつて指摘されていることである。

更にカントは数学を公理によつて定義するいわば公理体系論とみなし、数学とはこの公理を前提にする学であるが故に、自然の物体にみられないことも「数学の物体においては真であることも可能である」<sup>(9)</sup>と考えることによつて、数学と自然学との差異を明らかにしている。

『活力考』におけるカントの空間論は上述の如く実体の相互作用にその根拠を有する空間論である。その実体の相互作用に基づいて、数学的空間と自然学的空間、多次元空間と三次元空間の各々に妥当範囲を限定することによつて各各両空間を区別し、それらの両空間の共存を主張している。この『活力考』において「実体の相互作用」の意味は不問のままに終つてゐる。

### (三) 機械論的無限空間

『天体史考』はいわゆるカント・ラプラス星雲説として後に評価されるカントの天体論である。この『天体史考』はその副題にもある通り、ニュートンの徒としての「全宇宙の著作と力学的起源についての試論」である。カントは臆測をもまじえて、体系的な宇宙説の仮説をたて、ニュートンの徒としてカントは引力及び斥力を銀河系をも宇宙の一部として含む大宇宙に適用した。

引力と斥力は「等しく根源的であり、普遍的である」<sup>(10)</sup>。しかし「今日」<sup>(11)</sup>の「形成された諸天体が回轉運動をする前の

状態<sup>(11)</sup>」即ち「直接に創造されたばかりの自然<sup>(12)</sup>」は「混沌<sup>(11)</sup>」とした「諸元素<sup>(11)</sup>」で構成されており、この混沌を構成している諸元素の本質が「神の理念<sup>(11)</sup>」から生じたものであるが故に、「神の完全性のメルクマール<sup>(13)</sup>」を有する。従つて、これらの諸元素が単独に自己形成して、宇宙を形成しても、この宇宙を構成する諸元素が「神の完全性のメルクマール<sup>(13)</sup>」を示す限り、宇宙は有限ではありえず、無限な宇宙、無限な空間である。

カントは混沌たる諸元素の充実した宇宙が「一瞬間<sup>(14)</sup>」のみ続き、その静止状態が無限なる諸元素の引力と斥力という本質力によつて自己形成し、その結果、宇宙は現在のような回転運動をなすに至つたと説明している。この回転運動における引力の中心点となつた「中心物体<sup>(15)</sup>」の一つをカントは太陽と考えている。カントは上述の太陽を中心とする太陽系が銀河系に含まれ、この銀河系が宇宙系に、更に、この宇宙系がより広大な宇宙系に含まれるというように無限な宇宙を考えている。

以上の宇宙論から明らかかなように、カントは充実空間の存在と空虚空間の存在に関して各々の妥当範囲を限定することによつて、各々の空間を承認している。言い換えるとカントは少くとも公転以前の静止状態において、形而上学者による充実空間を承認し、公転時においてニュートンによる空虚空間を承認している。そこでカントの独自性を理解するために、ニュートンとカントの差異を叙述する。

ニュートンは「神の直接の手<sup>(16)</sup>」を運動の原初的段階において認めている。一方、カントはより完全なものへと自己形成する能力を承認することによつて、発生論的宇宙論を展開している。更に、ニュートンは「運動力学の傾向によつて自然が没落する<sup>(17)</sup>」と考えたことに対して、カントは「完了することのない創造<sup>(18)</sup>」を想定し、その下で「新しい宇宙の産出<sup>(18)</sup>」を主張する進化論的宇宙論を展開することによつて、カントはニュートン以上に徹底したニュートンの徒

となることになってニュートンを越えていると言つても良いであろう。

#### (四)、宇宙調和論

カントは『新解明』において『活力考』における空間の根拠であつた実体の相互作用の根拠を探究し、ライプニッツの原理を批判しつつ、カント独自の実体論いわゆる宇宙調和論を主張する。

ライプニッツによると同一律に基づく真理が永遠真理であり、充足理由律に基づく真理が事実真理、偶然的真理である。しかもライプニッツによるとすべての真理が同一律に基づくが故に、事実真理の原理としての充足理由律は潜在的な同一律として同一律に基づくことになる。そこでカントは真理を説明する認識根拠である同一律及び充足理由律に満足することなく、「反対さるべき述語を斥けることによつて命題の真理性を決定する」<sup>(19)</sup> 根拠即ち決定根拠を主張する。

無限実体である神の知性による決定根拠に基づいて個々の実体の相互作用が成立する。そして、二つの原理「継起」と「共存」<sup>(21)</sup> は実体の相互作用に基づく原理である。

カントは継起に関して「変化とは決定の継起であり」<sup>(22)</sup>「変化の原因は外的連関に由来する」<sup>(22)</sup>と考へている。この原理はライプニッツのように神の本質に由来するのではなく、神の存在に由来する。

カントは共存に関しても「諸実体による相互作用の共通の根拠」<sup>(21)</sup>即ち「神の知性」<sup>(21)</sup>を承認している。

更に、カントは有限実体である「心」<sup>(23)</sup>に「外部と対応」<sup>(23)</sup>させている。

ライプニッツのモナド論によると個々のモナドは無窓であるが故に、各々のモナド間に予かじめ調和を与えるものとしてモナドのモナド即ち神を承認している。

ライプニッツの無窓のモナドに対して、カントは有限実体の相互作用を認めた。カントはこの相互作用そのものが「神の知性によって相互関係に立つように維持されている」<sup>21</sup>と考えることによって、相互作用に神という共通の根拠を承認した。しかし、この相互作用は直接的には有限実体の決定根拠に基づいているのである。

空間は「諸実体の相互作用に根拠を有する関係」<sup>24</sup>であり、有限な諸実体の相互作用である空間が無限な実体に基づいている限り、カントの空間は実体とは無縁で、実体から独立した空間いわゆるニュートン空間即ち絶対空間ではありえない。

「神意にかなうなら」<sup>24</sup>という留保つきではあるけれどもカントは多次元空間の可能性を承認し、「数多くの世界が形而上学的意味でも存在しうるということは不合理でない」<sup>21</sup>と主張し、多世界説を認めている。

継起及び共存という極めて経験論的要素の多い概念をカントは登場させているけれども、それらは実体の相互作用に基づく限り、完全に経験論的概念ではありえない。

カントは決定根拠に基づく継起と共存を用い、ニュートンの引力をライプニッツの実体に付加することによってカント自身の実体論換言すれば神の知性と「神の意図」<sup>21</sup>に基づいて宇宙の全実体の調和を可能にするいわゆる普遍的調和論を展開したのである。言い換えるとカントは実体に斥力と引力を認めたのである。そこで次に実体の本質力としての引力と斥力との関係が問題となる。

空間の根拠としての引力と斥力の関係を自然界に限定して論述することが『物理的単子論』の課題である。

##### (五) 空間に関するアンチノミー

『物理的単子論』においてカントは「モナドは単純実体である」<sup>25</sup>というモナドの定義から論述を開始している。カン



トによると引力と斥力とは「実体に内在する力」<sup>(26)</sup>であり、「空間は実体の外的關係の単なる現われ」<sup>(27)</sup>である。それ故カントは実体に「外的現前」<sup>(28)</sup>及び「内的規定」<sup>(28)</sup>を認める。

実体の外的現前の「作用範圍」<sup>(28)</sup>即ち空間と実体の内的規定即ち單純性を區別することによつてカントは空間分割の二律背反を調停している。

空間は單純性を有する実体の外的な相互作用即ち斥力が働いている「作用範圍」<sup>(28)</sup>のことであり、斥力即ち「不可入性」<sup>(28)</sup>が働いている範圍が充実空間である。それ故、充実空間とは單純性を有する実体そのものでない。従つて、空間の分割は実体には波及しえないのである。空間の分割は斥力の作用範圍即ち実体の外的規定の働いている範圍のみにおいて可能であり、空間の分割は実体の内的規定即ち單純性へとは拡大されえないのである。実体の規定を内的と外的とに區別すること言い換えると空間分割の妥当性の範圍及び限界を設定することによつて、充実空間の可分割性と実体の單純性が並存するのである。

形而上学と自然学との対立の調停とは空間分割に関する対立の調停のみならず、空虚空間の否定とその肯定との調停をも意味する。

カントはこの課題を前述のごとく『天体史考』において考察し、『天体史考』及び『新解明』において採用したニュトンの引力を通じて調停している。

カントは空間分割の議論と同様、空虚空間と充実空間の各々の限界を設定することによつて、両空間の並存を主張する。

充実空間とは実体の外的作用である斥力即ち不可入性が主として働いている範圍のことであり、この範圍では空虚

空間の存在は考えられない。

『天体史考』において考察されたように、宇宙が無限であるならば互いに近接しえない実体があり、それらの実体間の外的関係は斥力のみでは説明が不可能である。

カントは「球」の例を引き、「引力と斥力が等しくなる点を不可入性の限界」<sup>(29)</sup>であり、「外的接触圏即ち容積」<sup>(29)</sup>である」と規定している。この引力は「一定の距離で不可入性の力と均衡を保ち、占有した空間の限界を定めるものである」<sup>(30)</sup>。相互作用としての引力と斥力のうちで、主として引力が働いている範囲即ち容積の外側が空虚空間で、主として斥力が作用している範囲即ち容積の内側が充実空間である。

実体の相互作用即ち引力と斥力によって空間が成立し、それらの「強さは力の及ぶ空間の距離の増加とともに減少」<sup>(29)</sup>するけれども、強さが皆無となるとは考えられないので、完全に引力のみが作用する空間及び完全に斥力だけが作用する空間は考えられない。それ故、空虚空間とは完全に空虚な空間でなく、いわば見かけ上、引力のみが働いている範囲のことである。

カントは空間の根拠を実体の外的規定に求めた。しかし、いかに実体の外的規定に基づいて空間が成立していても、偶有性はその基体なしには成立しえない。それ故、空間は空間の基体である実体なしには存在することができない。

カントは空間規定に関する実体の外的関係の現われという現象的側面と単純性という非現象的側面とを作用力即ち引力と斥力を通じて結合している。その結果、作用力は無限実体としての神に依存する実体的側面と有限実体である他の実体に依存する自然因果律の支配する現象的側面とを有せざるをえなくなったのである。

## (六) 現実空間とその根拠

『運動と静止の新説』において、運動は「場所の変化」(die Veränderung des Ors)<sup>(31)</sup>であり、「物体の場所は状態 (die Lage)」、位置 (die Stellung)、物体の他に対する外的関係によって認識され、「運動と静止という表現を相対的意味において使用すべきである」とカントは考えている。ここではカントは物体の運動と静止を判定する基準をある物体の他のものに対する外的な空間関係に求めた。そして現実空間はあるものが他のものに対する外的関係に依存して規定されるが故に、現実空間における場所・位置等の空間規定は絶対的な規定ではなく、相対的な空間規定である。従って運動する物体を含む空間も相対性を有する。続いてカントは「たとえ私がすべてのものがない数学的空間を物体の一つの倉庫 (ein Behältnis) として想像しようとも、そのことは援助にならないだろう。と言うのは何によつて私は物体的なものが占められていない空間の部分と異つた場所を区別すべきであろうか」と記述している。言い換えると物体的なものが空間の部分及び場所を占めていない空間即ち物体を含まない空虚な数学的空間は我々が空間の部分及び場所を区別するための基準としては役に立たないとカントは主張しているのであり、数学的空間そのものが思惟すらできないと主張しているのではない。

カントは『運動と静止の新説』に続く『オプティミズム試論』において「神の知性すらあらゆる数の最大数を思惟しない<sup>(32)</sup>」という表現で神の知性を制限しつつも、神の完全性を規準にして、無限界と有限界とを区別している。

完全性とは相対的には「多くのものが一つの規準と一致する<sup>(34)</sup>」ことを意味し、絶対的には「それぞれのものが自己の内に一定の度の实在性を有し<sup>(34)</sup>」それが「最高の实在<sup>(35)</sup>」である「神の諸属性と一致することを意味する<sup>(35)</sup>」。カントはこ

の實在性を有する相対的な完全性の度に基づいて多数の可能的世界と神の諸屬性に最も近い我々の世界とを區別し、絶對的な完全性に基づき神と相対的な完全性しか有しない我々の世界を區別している。

我々の世界は「神の選<sup>(36)</sup>択」に基づいて成立しているが故に、多数の可能的世界と異なり、最高の實在である神に最も近い我々の世界は多くの可能な世界より實在の度を多く有する世界である。しかし、神の選<sup>(36)</sup>択によるとは言え、我々の世界が現實に存在しているが故に我々の世界は最も神の諸屬性に近い實在性を有する世界である。カントは以上のことを次のように表現している。「ある一つの最も完全な世界が可能である。というのはそれが現實に存在しているからである。」<sup>(36)</sup>

『オペティミズム試論』において、完全性の基準として「Aと非A」<sup>(35)</sup>という實在性の制限と度が採用されることによつて神という存在根拠と現實存在の根拠いわゆる決定根拠との差異の萌芽が出現することとなつた。言い換えると存在の根拠を神に求めるのみならず我々の現實の世界にも求めるのである。

更に、カントは實在性の制限と度に基づいて有限と無限の連続が可能で数字的世界と有限と無理の連続が不可能な現實世界を區別している。幾何学を含む数学的世界は實在性の中に制限されない世界であり、我々の世界は有限な實在性に制限されている世界である。

『活力考』から『オペティミズム試論』に至るカントの空間論とは普遍的調和論という實體論に基づく空間論であり、實體から定義を始めるという演繹的論述方法を採用した合理論的形而上学に基づく空間論である。その結果、この期のカント空間論において、實體の作用力を媒介にして本体的秩序と現象的秩序との連関が可能となり、本体的秩序を連続的に拡大することによつて現象的秩序の成立が可能となつた。言い換えると實體に神の知性による本質力という

本有的規定と引力及び斥力という現象的規定を与えることにより、実体の存在根拠に二義性が出現した。<sup>37)</sup>カントの存在根拠とは対立した存在をも排除して真理性を決定する決定根拠である。従って、神という存在根拠と決定根拠としての存在根拠を区別することによつて、いわゆる神の存在証明が不可能となり、存在根拠を現象的側面に求めざるをえなくなつた。

## 二、経験論的空間論

### (一)、根拠について

カントは『新解明』における存在根拠の問題、具体的には相互作用に基づく継起及び共存の主張を通じて経験論的傾向を強めていくことになる。『新解明』において存在根拠と認識根拠とが区別され、『オプティミズム試論』において形式的根拠とは異つた、形式論理学における矛盾律から導出不可能な実質的根拠が主張された。その結果、根拠の問題を通じて、カントは一七六〇年代前半の諸論文において、形式論理学を中心とする合理論的形而上学の妥当性及び限界を解明し、存在根拠を現象的側面に求めることによつて経験的形而上学を展開する。

『神の現存在の唯一可能な証明根拠について』(『神の存在証明』と略す)において、カントは神の存在証明として①デカルト的存在論的証明②宇宙論的存在証明③自然神学的証明を吟味する。①は「根拠として可能的なものから帰結として神の存在を推論」<sup>38)</sup>することであり、「論理的分析のみによつて」<sup>38)</sup>概念から存在という述語を導出することを意味する。しかし存在は概念の内に含まれないが故にカントは①の証明を拒否する。②と③とは「経験的なものから神の屬性」<sup>38)</sup>を推論する証明法である。②は間接的な推論形式をとり、③は直接的な推論形式をとる。②は論理的根拠と実在的根

拠の混同により成立するが故にカントはこの証明法も拒否する。③は有限なる我々が無限なる「最も完全なるもの存在」<sup>(39)</sup>を「数学的な確実性と厳密性」<sup>(39)</sup>をもって推論することは不可能であるので、カントはこの証明法も拒否する。次にカントによる証明を考察する。

カントは「唯一の神が存在する。そしてこの神の存在を必然的に洞察させる唯一の証明根拠が存在する」<sup>(41)</sup>と主張している。この唯一の証明根拠とは「帰結として可能なものから根拠として神の存在」<sup>(38)</sup>を推論する方法である。カントの主張する証明は次のように記述することができよう。物の思惟可能性が成立するためには実在的根拠としての物の実在的可能性が先行していなければならず、物の実在的可能性が成立するためには可能性の「究極の実在根拠」<sup>(42)</sup>が存在していなければならない。というのは究極の存在根拠が存在しなければすべての可能性は成立しえなくなるからである。そして究極の実在根拠とは神である。従って神は存在する。言い換えるとカントの主張する証明法とは物の思惟可能性から、その前提である物の実在的可能性を媒介にして、全可能性の究極的な根拠である神の存在を推論する方法を意味する。

カントはこの『神の存在証明』において存在を「論理的関係を越えた」<sup>(43)</sup>「絶対的定立」<sup>(44)</sup>であり、存在は主語がすでに存在するものと前提されている場合にのみ主語に属する述語となると主張している。従って神が存在すると主張するためには神がすでに我々に与えられていなければならないことになる。又、物の実在的可能性を前提にする限り、物の思惟可能性は絶対的定立として経験的に与えられうる物の存在を前提にしなければならない。しかし、神の存在という「対象の性質と我々の悟性の能力を考えあわす」<sup>(45)</sup>ならば神の存在は我々の経験の対象とはなりえない。以上の考察からカントによる証明法も神の存在証明としては不適切であることになる。カント自身も「形而上学的探究に依存

しなくとも<sup>(48)</sup>「神というものが存在する<sup>(48)</sup>」と記述し、別の箇所で「神の存在を確信できさえすればよい<sup>(49)</sup>」と表現している。カントはその証明をそれほど「重要でない<sup>(47)</sup>」と考えている。

しかし、存在が「なんらかのもの<sup>(48)</sup>の述語ではなく<sup>(48)</sup>」物の絶対的定立<sup>(51)</sup>であり、述語が「存在をあらわしている時には、主語自身が存在するものであるという前提がすでになければならない<sup>(45)</sup>。」というカントの主張はカント哲学における合理的傾向から経験論的傾向への移行を意味する。

『新解明』における認識根拠と存在根拠の問題は『神の存在証明』においては論理的根拠と実在的根拠の問題として論述された。カントは『負量の概念を哲学に導入する試み』(『負量の概念』と略す)において、論理的根拠と実在的根拠の区別を次のように反対概念に適用する。「一方が措定したものを他方が廃棄するとき、二つのものは互に反対<sup>(50)</sup>」であり、反対には二種類あり「一つは論理的反対であり<sup>(50)</sup>」「もう一つは実在的反対である<sup>(50)</sup>」。論理的反対とは矛盾律に基づく反対のことである。

カントは数学における負量の概念を参考にして負の概念を導入することによって、実在的対立について論述する。カントは「実在的対立とはあるものの二つの述語が互いに反対する場合の対立である。一方が措定したものを他方が廃棄する。しかしその結果は何にかであつて無でない<sup>(50)</sup>」と規定する。以上のことをカントは物体の静止の例を用いて「一物体が正反対の方向から同じ力で引かれるならば<sup>(53)</sup>」その結果としての物体の「静止は何かで、無でない<sup>(51)</sup>」と論述する。この何かをカントは「0<sup>(51)</sup>」と呼ぶ。カントによると数学における「全く積極的な正の量であり、ただ他の正の量に対立している意味で負である<sup>(52)</sup>」という負量の概念も実在的対立に基づいており、 $+ \text{---} - \text{---} = 0$ の0も何かとして現実に存在するのである。

この負量の概念が諸現象に適用可能であり、その結果、諸現象中に実在的対立が成立することをカントは立証しようとする。その際、カントは実在的対立を現実的対立と可能的対立の二種に分類している。現実的対立とは「二つの物体が同一直線上を互いに向き合つて同じ大きさの力で衝突する」<sup>(53)</sup>場合であり、可能的対立とは「二つの物体が同一線上を反対の方向に同じ大きさの力で遠ざかる」<sup>(53)</sup>場合である。

カントは現実には経験不可能な場合もありうる可能的対立という実在的対立を世界、道徳の問題、神の意志の問題等に適用可能と考えている。例えば世界の全変化即ち生成の総和という経験界の諸法則を含む一般的法則が実在的対立に基づいて成立すると考える場合、この実在的対立とは可能的対立をも含む。

カントは経験的に与えられねばならない現存在の概念に基づいて現実的対立を解明した。その限りでは現実的対立の適用というカントの主張は経験界に妥当しうるのであろう。しかし経験の可能性を越えた生成の総和や神の意志を可能的対立の概念によつて論ずることは実在的対立である可能的対立が経験性と超経験性と二義性を有することを許すことを意味する。言い換えるとカントは経験的なものによつて超経験的なものを解明しようとしているのである。

## (二)、経験論期における方法

『二段論法の四つの格の偽なる煩瑣の証明』における所見としてカントは次のような記述をしている。

「判断」<sup>(56)</sup>する能力である悟性と「推論」<sup>(57)</sup>即ち「間接的な判断」<sup>(58)</sup>する能力が「上級認識能力」である。「表象を思考の対象にする能力」<sup>(59)</sup>とは「内官の能力」<sup>(58)</sup>である。内官の能力と悟性が作用することによつて判断が可能となる。

前述(二一)のごとく、カントは実在的根拠を求めた。そのためには判断の基盤となる内官及び経験的なものの解明が重要となる。内官の能力は「根本能力」<sup>(58)</sup>であり、判断を可能にする「秘密の力」<sup>(61)</sup>であるというカントの主張



は経験的側面が強調されつつあるのである。

カントは『神の存在証明』において「分析」<sup>(59)</sup>という手段を使用して論を進め「真理性」<sup>(59)</sup>と「明白性」<sup>(59)</sup>を明らかにすることを意図した。カントは論理的根拠と実在的根拠を明確に区別し、存在を絶対的定立として、経験的なものを基盤にして絶対的なものへの探究を開始する。カントの主張する分析とは分析したものを「建築の材料」<sup>(59)</sup>として「建物」の完成<sup>(59)</sup>をめざす分析である。言い換えると分析とはいわゆる総合のための分析を意味する。

『負量の概念』において数学と形而上学を区別して、数学の方法を形而上学に適用することは断念し、数学の成果を形而上学に生かそうと試みた。カントは両者の区別を『自然神学と道徳との原則に関する判明性の論究』（『判明性の論究』と略す）において展開する。

確実性を有する数学的認識を獲得する方法とは「概念を任意的に結合する」<sup>(60)</sup>こと即ち総合的方法であり、この方法によって定義が成立するのに対して、哲学における方法は「与えられているが、しかし、混乱し、充分規定されていない」<sup>(61)</sup>「概念を分析」<sup>(60)</sup>することを意味し、この分析の成果に基づいて「認識の判明性や確実な推論の可能性」<sup>(60)</sup>が出現する。

六〇年代前半のカントの学的方法とは「アポステリオリな道によって絶対的に必然的な存在へと上昇する」<sup>(61)</sup>方法即ち現象的なものを出発点にした分析によって絶対的な存在へ到る方法である。

更に、カントが数学と哲学を厳密に区別し、いわゆる普遍数学を認めず、数学を総合により可能となると考察している点において、カントは経験論者や合理論者とは異なる道を歩んでいることになる。

### (三) 六十年代前半の空間論

六十年代前半の諸論文において、カントは空間を合理論期における論述方法である定義からではなく、まず分析という方法を用いて論究を開始し、これ以上分析できない諸概念を承認している。例えば『神の存在証明』において、カントは「単純<sup>(62)</sup>」で「周知の概念を分析するような<sup>(62)</sup>」ことはしないと主張し、空間を単純で周知の概念とみなしている。『判明性の論究』においても、同様の主張を認めることができる。『判明性の論究』においてカントは「形而上学においてあらゆる分析は必要である<sup>(68)</sup>」けれども、これ以上「分析できない (unauflöslich) ような概念<sup>(64)</sup>」があり、空間をそのような概念の一つであると論述している。

『負量の概念』において、カントは「幾何学が与えてくれる<sup>(64)</sup>」空間及び数学が問題にする無限小を「すでに証明済みの確実なもの<sup>(64)</sup>」であり「無限小の概念が正しいことを自然がかなり明らかに証拠だてているようにみえる<sup>(64)</sup>」と記述している。それ故、空間は「すでに証明済みの確実なもの<sup>(64)</sup>」であり、空間は定義しようとする前に「私に与えられている<sup>(64)</sup>」のである。カントはこの空間を諸現象を分析し、綜合するための「自らの思索の基礎<sup>(64)</sup>」とするのである。

『神の存在証明』において、カントは「空間が存在するところには必ず外的関係が存在する<sup>(62)</sup>」ということ、「空間は三次元以上もちえないこと等々を確言できる<sup>(62)</sup>」と記述している。この場合は我々の直接経験可能な世界において外的関係が成立するための前提として三次元空間を考えているのであり、非ユークリッド空間を拒否しているのではない。というのは『判明性の論究』において形而上学と数学を明確に区別したことからも明らかである。三次元空間とは我々の知覚可能な現実空間のことである。カントは『運動と静止の新説』において、運動及び静止を判定する際に基準を外的空間との関係に求め、六十年代前半において、現実的な外的空間とは三次元空間であり、この空間は分析不可能なものとして我々に与えられており、「空間の本質<sup>(63)</sup>」についての正しい説明を不必要であると考えている。

『運動と静止の新説』において、ある物体の運動とは場所の変化を意味し、場所の変化は外的空間との関係によって判定可能となった。ある物体と他の物体との外的空間関係とは、いわばある物体の位置と他の物体との位置を結んだ方向を含むものである。二物体の衝突について記述しているが、二物体の衝突もある位置を共有しうる二物体の方向を含む空間を前提することなしには論じえない問題であろう。

『負量概念』における負量も相反する二つのものが共有する方向を前提として論じられている。

カントは『方位の区別』において、方向と空間の関係を説明する。言い換えると『方位の区別』においてカントは空間の本質を説明するのである。

#### 四、経験論期における空間論

カントは『方位の区別』において、空間の「可能性の第一根拠」を「哲学的に探求する」ことを目的としている。言い換えると、この論文の目的は「絶対空間は一切の物質の現存在から独立であり：それ自身物質合成の可能性の第一根拠としてある固有の実在性を有する」ことを証明することである。そこでカントは方位の概念を通じて相対空間の根拠を説明しようとしている。

方位とは『負量概念』においては方向として論述されたものであり、「位置の体系的絶対的宇宙 (die Weltraum) に対する関係の内にある」<sup>(65)</sup>方位は「延長体の外の空間に關係し」<sup>(66)</sup>延長体が部分としてみなされなければならない総体 (die Einheit) としての普遍空間に關係している」<sup>(68)</sup>と規定している。言い換えると、方位は総体としての絶対的宇宙という絶対空間の存在を前提にして成立し、方位の役割は空間の諸部分の位置を秩序づけることである。個々の物の位置が個々の延長体としての部分空間に含まれ、部分空間は方位の概念を通じて絶対空間の下に秩序づけられることが

可能となる。従つて、方位の概念を媒介として部分空間は総体としての絶対空間との関係においてのみ、その総体の一部として相対空間となり、部分空間となる。

カントは絶対空間が現実性を有することを、方位が我々の感覚によつて経験的に決定されているという経験的事実によつて証明できると考えている。

方位の概念はいわばアプリアリな道を通じて絶対空間から導出されるけれども、我々が方位を決定する際には、我は我々の感覚に基づき、いわばアポステリオリな道によつて現実には方位を決定している。従つて、方位の決定が経験的事実として現実性を有するが故にその根拠である絶対空間も現実性を有するということがカントの主張である。

経験的事実とは具体的には「右手と左手、ある物体と鏡の中のその写像」<sup>(67)</sup>等々の「不一致対象物」<sup>(67)</sup>が存在することを意味し、カントはこれらの不一致対象物の存在を根拠にして絶対空間が現実性を有することを証明しようとしている。

不一致対象物とは対になるものの一方という意味で、カントは右手と左手の例を引いて右手と左手は相互に等しく、相似しているけれども、同一の限界線内に含まれないので両手を真に区別するためには絶対的根源的空間にのみ関係する区別によらなければならないと主張する。

絶対空間とは「外的感覚の対象ではなく、外的感覚のすべてを可能にする根本概念である」<sup>(68)</sup>しかも我々は「我々の外にあるすべてを感覚を通じて知る」<sup>(68)</sup>のである。言い換えると我々は不一致対象物という経験的对象の存在を感覚という経験的能力によつて知り、更に不一致対象物を区別するために方位の概念に依存し、方位の決定が現実的であるが故に、絶対空間の現実性を知るのである。

この論文で問題となっている空間とは絶対空間と部分空間である。部分空間とは右手と左手の例でも明らかのように、等質な三次元空間であり、外的感覚の対象となる世界即ち経験界である。しかし、絶対空間とは外的感覚の対象となりえない空間であった。カントは感覚を出発点としてアポストリオリな道を登り絶対空間という超感覚的なものへと到着した。従ってカントは感覚という経験的能力に基づいて成立した「空間概念を叡知界にまで拡大して適用する可能性をimplicitに許したことになる」<sup>70</sup>のである。

『方位の区別』におけるカント空間論の独自性は方位の根拠としてのニュートンの絶対空間の承認と同時に「方位の概念を産出すべき最初の根拠」<sup>69</sup>としての知覚空間論ないしは身体空間論の主張である。

「我々は我々の外にある一切を：感覚を通じて知るのである」<sup>69</sup>が故に、感覚を含む身体との関係で方位が決定されるのである。前後、左右・上下の区別は我々の身体を基準にして成立するのである。言い換えると前後、左右、上下という方位を含む空間は身体と現実的な経験の対象である外的対象との関係から成立し、その関係が成立するための基盤として身体による知覚が前提されているのである。従って、このような身体に基づく空間を身体空間と称することもできよう。カントが『方位の区別』においていわば身体空間論の一端を記述していることは注目には値するのではなからうか。

## 結び

五十年代においてカントは定義から論を展開するアプリアリな道を通じて実体から空間を導出した。その結果、空間の存在根拠に二義性が出現した。そこで六十年代前半において、カントは合理論的立場を離れ、経験論的立場に立

ち、存在根拠の現象的側面に注目し、分析という方法を採用し、空間を分析しえないものと考えた。カントは六十年代後半において経験論的立場から空間の根拠を説明しようと試み、方位の概念を通じて空間の根拠として超経験的な絶対空間の実在性を承認した。その結果、アプリアリな絶対空間は可能性の第一根拠として方位の決定というアポステリオリなもの根拠となった。

しかしカントは批判期において外的経験の根拠としての絶対空間を拒否している。空間規定の有するアプリアリ性とアポステリオリ性の調停がカントの次期の課題である。そこで批判期への移行を可能にする導きの糸の一つとして『視霊者の夢』におけるカントの主張を取りあげてこの論の結びにかえることにする。

カントは『視霊者の夢』において「物質的世界」<sup>(74)</sup>と「非物質的世界」<sup>(75)</sup>を区別する。物質的世界とは「見える世界」<sup>(76)</sup>であり、感覚を通じて認識が可能な世界である。非物質的世界とは「知性界」<sup>(77)</sup>であり、いかなる「経験によつても洞察も認識も不可能であるけれども、その可能性を仮定することができる」<sup>(78)</sup>世界である。以上のようにカントは物質的世界と非物質的世界との「異種性」<sup>(79)</sup>を認めつつ、人間魂に関してはこれら二つの世界との結びつきを認め、非物質的世界を道徳の成立する場として承認する。

カントは次のように霊について主張している。「物質によつて充実された一空間にさえ現存しうる存在者を想像する場合のみ一つの霊を保持することができるであろう」<sup>(80)</sup>しかしカントは「経験表象と少しも類推性を有しない」<sup>(81)</sup>ものは「全く具体的に思考することはできない」<sup>(82)</sup>と考えている。

カントの主張は霊的なものの存在の可能性を仮定することはできるけれども、霊的なものは異質なもので経験を通じて洞察することは不可能であり、延長という空間規定を霊に適用することは不可能であるとゆうことを意味する。

従って空間規定が物質的世界にのみ妥当することになる。

空間規定の適用を物質的世界に限定することを基盤として『方位の区別』における我々の有する身体空間と絶対空間の有する根源性を内在化することが批判期の空間論への道を歩むための不可欠な条件ではなからうか。

### 注

- (1) Kant, C, I. S. 487 カントからの引用はすべてカッシラー版 *Immanuel Kants Werke*, hrsg. von E. Cassirer により、略号 C, を示した。またローマ数字は巻数を表わす。
- (2) Kant, C, I. S. 31
- (3) Kant, C, I. S. 145
- (4) Kant, C, I. S. 15
- (5) Kant, C, I. S. 16
- (6) Kant, C, I. S. 19
- (7) Kant, C, I. S. 20
- (8) Kant, C, I. S. 23
- (9) Kant, C, I. S. 143
- (10) Kant, C, I. S. 236
- (11) Kant, C, I. S. 265
- (12) Kant, C, I. S. 266
- (13) Kant, C, I. S. 263
- (14) Kant, C, I. S. 267
- (15) Kant, C, I. S. 268
- (16) Kant, C, I. S. 264

- (71) Kant, C, I. S. 320
- (81) Kant, C, I. S. 317
- (91) Kant, C, I. S. 399
- (80) Kant, C, I. S. 419
- (13) Kant, C, I. S. 422
- (82) Kant, C, I. S. 419f
- (83) Kant, C, I. S. 420f
- (72) Kant, C, I. S. 424
- (93) Kant, C, I. S. 489
- (92) Kant, C, I. S. 495
- (75) Kant, C, I. S. 493
- (88) Kant, C, I. S. 494
- (83) Kant, C, I. S. 497
- (92) Kant, C, I. S. 496
- (75) Kant, C, II. S. 18
- (82) Kant, C, II. S. 19
- (83) Kant, C, II. S. 34
- (75) Kant, C, II. S. 32
- (95) Kant, C, II. S. 33
- (96) Kant, C, II. S. 36
- (37) 高橋昭二『カントの弁証論』84頁、97頁
- (82) Kant, C, II. S. 165
- (85) Kant, C, II. S. 169



- (40) Kant, C, II, S.170
- (41) Kant, C, II, S. 171
- (42) Kant, C, II, S. 88
- (43) 高橋昭一「前掲書
- (44) Kant, C, II, S. 77
- (45) Kant, C, II, S. 78
- (46) Kant, C, II, S. 69
- (47) Kant, C, II, S. 172
- (48) Kant, C, II, S. 76
- (49) Kant, C, II, S. 73
- (50) Kant, C, II, S. 209
- (51) Kant, C, II, S. 210
- (52) Kant, C, II, S. 212
- (53) Kant, C, II, S. 231f
- (54) Kant, C, II, S. 232
- (55) Kant, C, II, S. 232f
- (56) Kant, C, II, S. 63
- (57) Kant, C, II, S. 64
- (58) Kant, C, II, S. 65
- (59) Kant, C, II, S. 70
- (60) Kant, C, II, S. 176
- (61) Kant, C, II, S. 97
- (62) Kant, C, II, S. 75

- (63) Kant, C, II. S. 180  
 (64) Kant, C, II. S. 206  
 (65) Kant, C, II. S. 393  
 (69) Kant, C, II. S. 394  
 (67) Kant, C, II. S. 398  
 (68) Kant, C, II. S. 399  
 (66) Kant, C, II. S. 395  
 (70) 高橋昭一 前掲書 188頁  
 (71) Kant, C, II. S. 347  
 (72) Kant, C, II. S. 344  
 (73) Kant, C, II. S. 352  
 (74) Kant, C, II. S. 337  
 (75) Kant, C, II. S. 353  
 (76) Kant, C, II. S. 335

付記 本稿は関西哲学学会第三十二回大会での個人研究発表に加筆したものである。

(研究生)